

# 北海道佐呂間高等学校

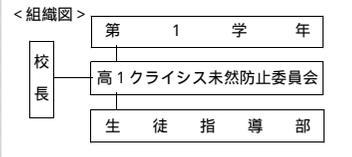
課程 全日制  
 学科 普通科  
 生徒数 123名

## 1 取組の特徴

自己肯定感に基づいた発展的な人間関係を構築できるように、コミュニケーションスキルトレーニングやアサーショントレーニングを行う。

## 2 取組のねらい

本校生徒は、ほぼ全員が同一中学校の出身者で、人間関係は比較的安定している。しかし、固定化された人間関係も見られることから、個人と集団の成長を促進するために、生徒一人ひとりの自己肯定感やコミュニケーション能力を高める。



## 3 取組の経過

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 4月 個人面談 の実施       | 12月 学級環境適応調査 の実施     |
| 5月 教員による集団カウンセリング | 教員研修会 の実施(中野武房先生)    |
| 6月 個人面談 の実施       | 1月 集団カウンセリング の実施     |
| 10月 学級環境適応調査 の実施  | 教員研修会 の実施(中野武房先生)    |
| 11月 個人面談 の実施      | 2月 宿泊研修における集団カウンセリング |
| 12月 性教育講話         | の実施(道立青年の家)          |
| 集団カウンセリング の実施     | 3月 本年度のまとめ           |

## 4 取組の内容

### 1 性教育講話(12月16日実施)

- (1) ねらい  
他者を思いやり、多様な人々と協力し支え合いながら生きていく態度を養う。
- (2) 対象  
1年生
- (3) 内容  
HIV感染についてのケーススタディ(話し合い、シェアリング)
- (4) 成果等  
自分と他人の違いを知り、相手を思いやる気持ちを持つことができた。
- (5) 生徒の感想
  - ・「人を大切にすることは自分を大切にすること」を忘れずにいたい。
  - ・考えて行動することが大切だと思いました。みんなで悩みながら答えを出しました。
  - ・今日は友達の色んな意見を聞くことができ、自分の考えが広がったような気がします。
  - ・自分と周りの意見を比較しながら話し合えたので、とても良い経験になりました。



### 2 集団カウンセリング(12月19日実施)

- (1) ねらい  
自他共に認め合い支え合う人間関係を構築する。
- (2) 対象  
1年生
- (3) 内容  
「ピアサポートトレーニングを通して学ぶ」(講師 函館大谷短期大学 中野武房教授)
- (4) 成果等  
他人の長所を見付けることができた。また、聞き手の態度が話し手に影響することを学ぶことができた。
- (5) 生徒の感想
  - ・普段、自分がどんな態度で人の話を聞いているかを振り返る良い機会になりました。
  - ・自分が話しているときに周りの人がしっかり聞いてくれて、とても嬉しかった。
  - ・自分から話したり相手の話を聞いたりするのが、とても楽しくなりました。



### 3 集団カウンセリング(1月30日実施)

- (1) ねらい  
自他共に認め合い支え合う人間関係を構築する。
- (2) 対象  
1年生
- (3) 内容  
「ピアサポートトレーニングを通して学ぶ」(講師 函館大谷短期大学 中野武房教授)
- (4) 成果等  
人をほめるためには、その人の良い部分を見つけようとする気持ちが大切であることを学ぶことができた。
- (5) 生徒の感想
  - ・人をほめるためには、日頃から広い視野で人を見ることが大切だと感じました。
  - ・言葉を選ぶことで相手との人間関係も良くなり、自分のためにもなると思いました。
  - ・トラブルを回避するのが難しいと思っているのは私だけじゃないんだと思いました。



## 5 次年度に向けて

- 1 成果
  - (1) 中途退学者及び不登校生徒数の推移  
中途退学者及び不登校生徒数は、昨年度に引き続き、いずれも0名となっている。(平成23年は1月末現在)
  - (2) 学級環境適応調査の結果分析  
調査の結果から、「介護施設体験学習」のあとに、生徒の「向社会的スキル」の数値が上がったり、友人関係に悩みを持つ生徒の「非侵害的關係」の数値が下がったりすることが分かった。
  - (3) 生徒の変容した姿  
話し合う(話し合おうとする)場面が多く見られるようになった。生徒同士が互いに認め合い、より良い人間関係を築こうとするようになった。
- 2 課題  
将来に可能性を見いだせない生徒に自己肯定感を高めさせる必要がある。また、不登校傾向や特別な教育的支援を必要とする生徒に、開発的な教育相談を継続する必要がある。
- 3 次年度に向けて  
本事業を通して学んだ教育相談の進め方や他校の実践を参考にしながら、地域の実態を踏まえた教育相談活動を進めていきたい。